

音楽のデジタル化と音楽聴取形態の変化について： デジタル世代のミュージッキング

著者	松田 健
雑誌名	研究論集
巻	97
ページ	181-198
発行年	2013-03
URL	http://doi.org/10.18956/00006088

音楽のデジタル化と音楽聴取形態の変化について

— デジタル世代のミュージッキング —

松 田 健

要 旨

19世紀の終わりに発明された録音技術は、音楽聴取を演奏現場から解放した。しかしその後100年ほどは「自宅に設置した装置で」再生するのが基本形であり続けた。その後音楽聴取デバイスのポータブル化と個別化が進み、CDに代表される音源のデジタル化は高品位の音源を簡便に入手できる環境をもたらした。

音楽の個別聴取化とデジタル化が進行した後生まれた「デジタル世代」の大学生たちはどのように音楽行為（Christopher Smallの言葉を借りると“musicking”）をしているのだろうか。筆者は2011年に118人の大学生に探索的な質問票調査を行った。

その結果、彼らの音楽聴取は個別形態をとる傾向が強く、スピーカーよりもイヤホンで音楽聴取をする時間が長いことがわかった。音楽聴取時間のうち「ながら聴取」が占める時間がおよそ4分の3に達することもわかった。またおよそ6割の回答者がパソコンを音楽聴取デバイスとして使用している状況もわかった。

キーワード：音楽社会学、オーディエンス、デジタル音楽、若者、iPod

1. 録音音楽の聴取史

エジソンやベルらの研究者が19世紀後半に開発した「録音」という技術は、20世紀における音楽聴取のありかたに決定的な影響を与えた。演奏現場からの解放である。その後の録音技術の革新と商業化は目覚ましく、20世紀前半のうちに家庭での音楽享受は普通のこととなった。音楽聴取がベンヤミンの指摘する「複製技術時代」に入ったことになる。ベンヤミンの議論では主にヴィジュアルアートが念頭におかれていたが、音楽への言及も含まれており、彼は複製技術により「会場や戸外で演奏された合唱も部屋の中で聴取される」（ベンヤミン1936=1970: 13）ようになった状況を1930年代に指摘している。

録音技術は空気の振動をそのまま樹脂製円盤などに傷をつけて記録するアコースティック録音からいったん電気信号に変換する電気録音へ、そして音声信号をデジタル変換するデジタル録音へと大きく発達した。これに伴い録音可能な周波数帯域が拡大し、モノラル録音からステ

レオ録音やマルチチャンネル録音への転換が行われ、録音現場における録音方法についても実に様々な思想や技術が開発されてきた。

録音の音質は飛躍的な進歩をとげた。ここ数10年だけを見ると、一部のマニアの間でアナログ時代の方が音質がよかった、いやデジタルの方が音質がよいなどの議論も起こったが、過去100年ほどの録音技術史の全スパンを鳥瞰したとき、また古い音源の実例を聴いてみると音質の向上は疑うところがない。現在残っている最も古い音源のひとつに1910年にイギリスの指揮者、トマス・ビーチャムが指揮をしたヨハン・シュトラウスの『こうもり』序曲がある（アコースティック録音）が、これを聴くと音質に隔世の感がある。本論文における「高音質」の考え方については後述する。

録音メディアも大きな発達をとげた。アナログ時代は樹脂製のディスク形状のもの（SPやLPなど）や磁気テープが中心であった。しかし操作性の向上——たとえばディスクの素材が割れにくいものに変更されたり、手間のかかるオープンリールテープが簡便なカセットテープにとって代わられたり——が試みられ、録音の長時間化も進行した。

しかし20世紀末が近づくまで「購入した音源を」「自宅に設置した装置で」再生する聴取パターンが揺らぐことはなかった。演奏現場から解放された音楽聴取は、再生装置が鎮座する屋内にほぼ限定される状態が続いたことになる。

音楽を本格的に「持ち運びできる（portable）」様にした最初の商品はいわゆるラジカセであった。典型的な仕様はラジオ・カセットレコーダー・ステレオスピーカー・マイクが一つの筐体に組み込まれ、AC電源およびバッテリー駆動が可能、というものであった。日本では好きなときに好きな音楽を自室で聴きたい若者がこれに飛びつき、中高大学生を中心に大きく普及した（『朝日新聞』1977.2.21朝刊）。日本でのラジカセ使用は、録音マニアが屋外での「生録（なまろく）」を楽しむ以外は自室での音楽聴取が主だったと考えられる。対照的に、海外、とくにアメリカ合衆国ではラジカセを屋外に持ち出し（“music on the go”）、好きな音楽を大音量で鳴らす若者が目立った¹⁾。スパイク・リー監督が映画『ドゥ・ザ・ライト・シング』（1989）で重要な題材としてとりあげた様に、北米などでは大音量のラジカセを迷惑に思う人が少なからずいた。日本はともかく、アメリカやイギリスではポータブルになった音楽が1970年代後半から80年代前半にかけ都会の喧噪をさらに増幅させる状況が出現した²⁾。

しかしその喧噪は次に出現した軽量・小型のポータブル音楽デバイスの普及により次第におさまっていった。そのデバイスとはソニー社の「ウォークマン」に代表される携帯型ヘッドホンカセットプレーヤー（以下「カセット式ヘッドホンステレオ」）であった。「ウォークマン」は日本で1979年に発売され、瞬く間に大ヒット商品となった。1980年の読売新聞が経済面で「オーディオメーカーでも、ソニーの大ヒットに刺激されて歩くステレオに追随する動きがあるほか、オーディオ製品の開発では戸外で楽しめる商品が焦点になっている」（『読売新聞』

1980.4.13朝刊)と分析しているとおり、以後家電各社が類似商品を出して世界中で爆発的に売れるようになった。ラジカセは通勤・買い物・ジョギングなどの場面には不都合であったうえ、サブカルチャーあるいはユースカルチャー的な位置づけがつきまとったのに対し、カセット式ヘッドホンステレオになってユーザーベースがかなり拡大したと考えられよう。

急速に普及したカセット式ヘッドホンステレオは、日本では電車内での音漏れが暴力事件をまねくなどの社会問題も引き起こしたが、ラジカセがしばしば他者に音空間の共有を強制していたのとは対照的に、屋外での音楽聴取を極めて個人的な行為にさせた。1981年の*Time* 誌は「世界を無視する格別的手段」と題する記事 (*Time*, May 18, 1981) で、カセット式ヘッドホンステレオが流行する背景には現代社会の自己中心的な風潮がある、と憂えている。そのあたりの価値判断はさておき、ここではカセット式ヘッドホンステレオにより音楽聴取の個別化が進んだことを重視しておきたい。

カセット式ヘッドホンステレオ以降で注目すべきことは、音源のデジタル化とネットワーク化がもたらした変化であろう。まず情報のデジタル化について検討してみよう。デジタル情報とは、様々な種類の情報(文字・色・画像・音声・映像など)を0か1で表す2進法の数字に置き換えたものである。これにより電気信号のオン・オフの切り替えというシンプルな作業で情報を記録・保管し、また取り出すことができるようになった。デジタル情報の特徴としては、大量の情報を操作・保管でき(裏返せばデバイスの小型化が可能)、理論上は完全なコピーが無限に作れることがあげられる。またアナログ信号とは異なり高品位での遠距離通信が可能で、ファイルを小さなパケットに分解することができる。さらに情報量は落ちるが数学的操作によりファイルの大きさを「圧縮」することも可能である。

デジタル化が音楽にもたらした恩恵のひとつは高音質化であろう。もちろんデジタル音源だからといってもサンプリングレートが低く、また大きく圧縮されたものは音質が悪くなるので、「デジタル=高音質」という自動的な定式が成り立つ訳では決してない。厳密にはより多くの情報量を使って(高サンプリングレートで)デジタル化し、できるだけ圧縮をかけずにファイル化しないと高音質を達成することはできない。またハイエンドのアナログメディア(たとえば末期のLPレコードやオープンリールテープの音源)を、高級オーディオ装置で聴取する場合と、デジタルメディア、たとえばCDを同様の装置で聞き比べ、どちらがよいかとする議論は存在するが、ここではそのような音質論議は核心的な問題ではない。ポータブルな音楽再生装置の歴史において、一般的に使われていたカセット式ヘッドホンステレオやFMポータブルラジオが達成していた音質と、デジタル化により出現したポータブルCDプレーヤーやデジタル式の携帯音楽プレーヤーの音質を比べると、後者の方が良好になっていることはほぼ疑いなく、その程度の意味でおさえておきたい。本論文上で認識しておきたいデジタル化による音質の改善点には、周波数帯域の拡大、ダイナミックレンジの拡大、S/N比の劇的改善、ワウ・フ

ラッターの克服、再生速度の正確化と安定化、などが含まれる。

デジタル化された情報はディスク類（フロッピーディスク、CD、DVD、ブルーレイディスク、ハードディスクなど）に保存することもできるが、ソリッドな記憶媒体に保存したりネットワーク上を移動させたりすることもできる。したがってデジタル化された音楽は、ディスクを使わずともネットワーク上で配布できるし、携帯電話・スマートフォンに保存することもできる。しかも理論上、音質の劣化が発生しない。一般のリスナーがデジタル音源を広く利用できるようになるのは1982年にソニー社とオランダのフィリップス社がCDのフォーマットを共同発表してからだ、デジタル技術の開発はパンドラの箱を開けるようなところがあり、レコード業界が音楽コンテンツの違法コピー対策に悩まされるようになったのも事実である。2001年に発売されたアップル社の携帯音楽プレーヤー「iPod」は、カセット式ヘッドホンステレオとは違い、大量の音楽コンテンツを持ち運べるようになった。同社は2003年には有料音楽配信サービスを立ち上げ、世界の主要レーベルを網羅して世界の音楽販売にひとつの回答を与えた形になっている。

日本でも日本レコード協会の調べ（2012）によると、インターネットからのダウンロードによる有料音楽配信の売り上げ実績は、2005年に18億5千万円であったものが2011年には118億7千万円と、およそ6倍の増加を見せた。その反面、CDによる音楽販売は減少しており、同協会によると、日本国内のCD（シングル・アルバムの合計）の生産は、金額ベースで2001年に4千9百億円足らずだったのが、その後毎年減少し、2010年には2千2百億円強にまで落ち込んだ。10年間で半減したことになる。音楽ソフトの流通形態に関しては、「ハード脱却」が著しいと言えよう。物理的な実体（CDなど）を使わなくなってきたのだ。

以上、簡単にではあるが、20世紀初頭から21世紀初頭までの音楽聴取デバイスの歴史とそれにとまなう音楽聴取行動の変化を概観した。20世紀末からの30年間ほどに関しては、(1)ポータブル（移動可能および軽量小型）化、(2)個別聴取化、そして(3)音源入手の簡便化、が注目される。

2. 大学生の音楽行動アンケート

21世紀の最初の10年が過ぎた現在、いわゆるデジタル世代の大学生の音楽行動（クリストファー・スモール（1998）の用語を借りると「ミュージッキング」）はどのようになっているのであろうか。彼らの音楽聴取形態、および音楽との接し方について探索的な調査を行った。この質問紙調査は2011年9月28日から同30日にかけて、関西外国語大学外国語学部の授業“Cultural Studies A”の受講生を対象に行ったものである。この授業はカルチャーの社会学、および音楽社会学の視点から音楽と社会の関係について考える内容である。調査実施にあたり、研究目的で使用すると断った上で記名式により実施した。質問紙調査における記名式／無記名

式にはそれぞれ長所と短所があるが、今回は個々の回答内容によって追跡調査をする可能性があったので記名式とした。もちろん集計データに関しては回答者名に関係しない、完全に統計的な処理を行った。音楽を扱う授業であることが履修理由になっている学生が多いので、同大学の学生一般と比べると音楽愛好度がやや高いかもしれない。回答者のより詳しいプロフィールについては後述する。

2.1. 設問内容

設問は大きく3つのグループに分けられる。1つ目のグループは回答者の音楽聴取行動に関する設問、2つ目はミュージック・メイキングに関するもの、そして3つ目は好みの音楽ジャンルに関しての設問である。

1つ目の音楽聴取行動については、上述の(1)ポータブル(とくに移動可能)化、(2)個別聴取化、そして(3)音源入手の簡便化が進んだ現在では若者がどのような音楽聴取行動をしているのかを探る。ここでは大学生の音楽聴取に関して、次の5つの仮説を検証する。

仮説1…音楽聴取には携帯音楽プレーヤーをもっともよく使用している。

仮説2…パソコンを音楽聴取デバイスとして利用することが多い。

仮説3…通学中などの「ながら聴取」が多く、専念聴取時間は少ない。

仮説4…イヤホンやヘッドホンの利用が主で、スピーカーの利用は比較的少ない。

仮説5…CDに関しては携帯音楽プレーヤーに取り込んで聴く場合が多く、CDを直接再生することは少ない。

仮説2は、デジタル化された音楽ファイル(データ)はパソコン上で入手・保存・管理する機会が多いからである。携帯音楽プレーヤーの多くはCDからパソコン上に取り込んだ音楽ファイルを転送して利用するものが多い。またパソコン内に音楽ファイルのライブラリーを揃えているケースが多いと考えられ、パソコンの利用率がもっとも高い年齢階級³⁾に属する大学生は、パソコンを音楽聴取のデバイスとして利用することが多いと想定できる。

次に、ミュージック・メイキングについても尋ねてみた。音楽の楽しみ方は、聴取という受動的な楽しみ方もあるが、作曲したり、演奏したりという能動的な楽しみ方もある。「聴く」音楽ではなく、いわば「する」音楽である。大学生のうち、カラオケで歌ったり、楽器を演奏したりする人の割合はどれくらいなのだろうか。

音楽の好みについても尋ねた。現在の大学生はどんな音楽ジャンルを好むのだろうか。主な音楽のジャンルについての好みを回答してもらった。

2.2. 回答者のプロフィール

回答者の総数は118人である。当該授業は2・3年生のみが履修しており1989～92年生まれが多く、年齢は20・21歳に集中している。性別は男性32人、女性が86人であった。

彼らは完全にインターネットおよびデジタル世代である。1990年生まれの場合だと、生まれた頃から既にCDは普及しており、2歳（1992年）の時にソニーがMDを発売する。初代iPodが発売されたのは11歳（2001年）の時で、小学校5年生であった。iPodは比較的高価でパソコンも必要だったので、中学時代（2003～2005年）から音楽好きだった人はMDプレーヤーを利用していたケースが多いと思われる。しかし高校生（2006年～08年）からはiPodなどの携帯音楽プレーヤーを愛用してきたことだろう。アップル社が音楽配信をする iTunes Music Store（後に iTunes Store と改名）が日本で開業したのは15歳の年（2005年）であった。

回答者は1980年代後半から90年代前半にかけてのバンドブームが終わったあとの世代である。宇多田ヒカルの“Automatic”が9歳（1999年）、SMAPの「世界に一つだけの花」は13歳（2003年）のときのヒット曲だ。1990年代中頃がピークであったカラオケブームも、回答者にとっては小学校低学年のときの事象であり、AKB48がNHK紅白歌合戦にはじめて出場したのは17歳（2007年）のときなので大学入学前であった。

2.3. 調査結果

2.3.1. 音楽聴取に用いるデバイス

表1は回答者が音楽聴取に使用しているデバイスとして挙げたものの集計結果である。「音楽を聴く手段として使っているものを全てあげて下さい」との設問に選択肢で回答してもらった。複数回答可である。アップル社の「iPod」を利用する人が69.5%（82人）と一番多かった。ちなみにソニー社の「Walkman」（カセット式のものではなく、内蔵型記憶装置を用いる携帯音楽プレーヤーのもの）が16.9%（20人）、その他の携帯音楽プレーヤーが4.2%（5人）であったので回答者の9割近くが何らかの携帯音楽プレーヤー（携帯電話以外のもの）を使用していることになる。仮説1（「音楽聴取には携帯音楽プレーヤーをもっともよく使用している」）は支持されたことになる。

第2位はパソコンで、62.7%（74人）がパソコンを音楽聴取に利用していると回答した。仮説2（「パソコンを音楽聴取デバイスとして利用することが多い」）も支持されたと考えてよいだろう。

携帯電話で音楽を聴いている人数も無視できなくなっている。とくに「iPhone」「アンドロイド携帯」「それ以外の携帯電話」を音楽聴取に利用する回答者の合計数は44.9%（53人）であった。今後はスマートフォンの高機能化・大容量化と普及が進行すると予想され、スマートフォンが音楽聴取デバイスの中心的存在になる可能性が十分ある。

表1. 音楽聴取に用いるデバイス（選択肢による回答、複数回答可）

デバイス	1. iPod	2. パソコン (パソコン用の外付けスピーカーを含む)	3. iPhone	4. CDラジカセなど (iPod等用の小型スピーカーを含む)	5. Walkman	6. 本格的オーディオ装置・ホームシネマ装置など	7. アンドロイド携帯	8. 携帯プレーヤー不使用	9. 上記以外の携帯電話	10. 上記以外の携帯音楽プレーヤー	11. その他	合計
N	82	74	31	30	20	20	13	13	9	5	5	118
%	69.5%	62.7%	26.3%	25.4%	16.9%	16.9%	11.0%	11.0%	7.6%	4.2%	4.2%	100%

※表中の%は全回答者数の118名に対する百分率

なお日本レコード協会の調査（2011）では音楽の聴取実体が屋内と屋外とに分けて調べられているが、屋内での音楽聴取に普段使っている機器としては、そこでもパソコンが約59%で第1位であった。また屋外の場合、「iPod」や「Walkman」などの携帯プレーヤーが41.3%で第1位であったという。本調査とほぼ同じ傾向を示しているといえよう。

2.3.2. 1日の音楽聴取時間と専念／ながら聴取の比率

1日の音楽聴取時間は平均で2時間44分であった。最長は12時間（2名）であった。12時間ともなると、大学生の場合、睡眠時間と授業に出席している時間以外ほとんど音楽を聞いていることになり、驚かざるをえないが、2時間44分という平均聴取時間にしてもやや長い印象がある。ベンチマークとして、NHKの国民生活時間調査（2010）のデータを見てみる。同調査では「CD・テープ（デジタルオーディオプレーヤーも含む）を聴く」時間について調べており、平日・土曜・日曜とも国民全体のおよそ1割弱が当該行為を行っており（行為者率）、行為者の平均時間は平日1時間31分、土曜1時間54分、日曜2時間10分であった。20代に限ると、行為者率は平日17.0%、土曜18.3%、日曜18.0%で、行為者の平均時間は平日1時間48分、土曜2時間10分、日曜2時間13分であった。やはりNHK調査よりも本調査の結果の方が大きい数字になっているが、これは本調査が音楽を題材とする授業の受講者を対象に行われたため、回答者に音楽愛好者が多いことが影響している可能性が考えられる。

注意したいのは、現在は音楽聴取のかなりの部分が「ながら聴取」になっている可能性である。携帯音楽プレーヤーを使うのは歩行中や電車の中などの移動中が多いことであろう。またラジカセの時代からそうであるように、学生は音楽を聞きながら授業の予習をする場合も少なくないだろう。

「専念聴取」と「ながら聴取」にかける時間の比率を10分比で書いてもらったところ、回答の分布は表2のようになった。聴取時間全体を10としたとき、専念聴取時間の占める割合が3

以下だとする回答数の合計は78.8%（93人）にのぼった。逆に専念聴取が7以上だとする回答数の合計6.8%（8人）にすぎなかった。現在、少なくとも大学生に関しては音楽を聴くことだけに専念する時間が少なくなっていることがわかる。なお回答者全体の平均は、2.6:7.4であり、ほぼ1:3の比率であった。

仮説3（「通学中などの「ながら聴取」が多く、専念聴取時間は少ない」）も支持されたとみてよい。なお上述のNHK国民生活時間調査ではテレビの「専念視聴」と「ながら視聴」の統計は取っているが、音楽聴取についても取っているのかどうか、入手できたデータの範囲ではわからなかった。

表2. 専念聴取と「ながら聴取」の比率

専念聴取と ながら聴取の 比率	0:10	1:9	2:8	3:7	4:6	5:5	6:4	7:3	8:2	9:1	10:0	N.A.	合計
N	12	27	33	21	5	8	3	3	1	3	1	1	118
%	10.2%	22.9%	28.0%	17.8%	4.2%	6.8%	2.5%	2.5%	0.8%	2.5%	0.8%	0.8%	100%

※表中の%は全回答者数の118名に対する百分率

2.3.3. イヤホン等とスピーカー

音楽聴取時間のうちイヤホンやヘッドホン（以後「イヤホン等」）を使用する時間とスピーカー経由で聴く時間を10分比で答えてもらったところ、回答者全体の平均は6.4:3.6であった。イヤホン等の利用時間はスピーカーの2倍弱で、圧倒的とまでは言えない。表3. は回答の度数分布表である。イヤホン等の利用が聴取時間の7割以上であるとする回答者は58.5%（69人）である一方、スピーカーの利用が聴取時間の7割以上であるとする回答者も17.8%（21人）おり、「スピーカー派」も小数とはいえ健在であることがわかる。

ちなみにこれらの「スピーカー派」（スピーカー利用が聴取時間の7割以上を占める回答者）21人のデータを抽出し、彼らの聴取デバイスを調べてみると、携帯音楽再生装置を使っていない回答者は2人に過ぎない。つまり彼らがイヤホン等を拒否しているわけではなさそうだ。また同じ21人のうち16人が音楽聴取にパソコンを使っており、高い比率となっている。下宿や自宅の自室でパソコンのスピーカーから、あるいは外部スピーカー経由で音楽を楽しんでいるのだろうか。かつてのラジカセに代わり、パソコンが大学生の音楽ステーションになっている姿が垣間見えるようだ。たしかに「スピーカー派」21人のうちCDラジカセを使っているのは5人のみであった。

このように、仮説4（「イヤホンやヘッドホンの利用が主で、スピーカーの利用は比較的少

ない)も、概ねの傾向としては認められた。

表3. イヤホンとスピーカーの利用比率

イヤホンと スピーカーの 比率	0:10	1:9	2:8	3:7	4:6	5:5	6:4	7:3	8:2	9:1	10:0	N.A.	合計
N	1	7	9	4	7	13	8	16	19	22	12	0	118
%	0.8%	5.9%	7.6%	3.4%	5.9%	11.0%	6.8%	13.6%	16.1%	18.6%	10.2%	0%	100%

※表中の%は全回答者数の118名に対する百分率

2.3.4. CDから直接聴くか

現在、日本で一般的な音楽入手経路はCDかネットワーク経由のどちらかであるが、日本レコード協会(2012)によれば、日本のリスナーが所有するデジタルライブラリの音源入手先は有償・無償・違法を含めCDが73%、ダウンロードが24%であるという。CDの利用が急速に減りつつある欧米と比べ、日本では現在もCD音源が主流ということになるが、携帯音楽再生装置で聴くのであればいったん音源を取り込んでしまうとCD媒体はほぼ不要になると考えられる。

回答者に「CDはパソコンや携帯音楽プレーヤーに取り込んで利用し、直接CDから聴くことは少ない」と「音源の取りこみもするが、けっこう直接CDから聴く」のどちらにあてはまるか尋ねた集計結果が表4.である。「直接CDから聴くことは少ない」とした回答者が67.8%(80人)、「けっこう直接CDから聴く」とした回答者が30.5%(36人)であった。CDから直接聴く形態が少数派になっているのは確かだが、壊滅的というほどではない。

表4. CDから直接聴くか

	1. CDはパソコンや携帯音楽プレーヤーに取り込んで利用し、直接CDから聴くことは少ない	2. 音源の取りこみもするが、けっこう直接CDから聴く	N.A.	合計
N	80	36	2	118
%	67.8%	30.5%	1.7%	100%

※表中の%は全回答者数の118名に対する百分率

仮説5(「CDに関しては携帯音楽プレーヤーに取り込んで聴く場合が多く、CDを直接再生することは少ない)については概ね支持されたが、CDからの直接聴取も残っていることがわかった。

2.3.5. ミュージック・メイキング

音楽聴取行動については以上の通りであるが、本調査では音楽を作り出すことへの関わりについても尋ねた（複数回答可）。表5. はその集計結果である。ここで目立つのはカラオケの人気で、回答者の70.3%にあたる83人が「カラオケで歌う」という。1990年代中頃のカラオケブームは過ぎ去ったが、カラオケが定着していることがわかる。社会生活基本調査（2011）によると、カラオケをする人の「行動者率」（同調査において年に1回以上当該行動をする10歳以上の回答者の割合）は10歳以上の全年齢層では29.0%だが、15～19歳で56.6%、20～24歳で62.9%と大学生の年齢を含む若年層では高い数字になっていることと合致する。

「聴くのが主で、ミュージック・メイキングはしないほうだ」とする回答が2番目に多く36.4%（43人）であった。ただしそのうち半数に近い20人は「カラオケで歌う」も選択しているので、自分から音を出すことがほとんどない回答者の比率は19.5%（23人）ということになる。

3番目に多かったのが「楽器を演奏する」という回答で、34.7%（41人）であった。2011年の社会生活基本調査では趣味や娯楽としての楽器演奏の行動者率は10歳以上の全年齢層で9.6%、15～19歳の年齢層で23.7%、20～24歳の年齢層で16.1%であるから本調査はかなり高い数字になっている。これは前述のような回答者特性（音楽に興味のある大学生が回答者になっていること）の影響かもしれない。

表5. ミュージック・メイキングの有無（複数回答可）

	1. カラオケで歌う。	2. 聴くのが主で、ミュージック・メイキングはしないほうだ。	3. 楽器を演奏する。	4. 演奏団体（ユニット、バンド、楽団、合唱団など）の一員である。	5. 作曲をする。	6. ボーカル／声楽をしている。	7. 音楽の演奏や作曲でお金を稼いだことがある。	合計
N	83	43	41	16	9	8	8	118
%	70.3%	36.4%	34.7%	13.6%	7.6%	6.8%	6.8%	100%

※表中の%は全回答者数の118名に対する百分率

数字の小さいところでは、何らかの「演奏団体の一員」であるとした回答者が13.6%（16人）、「作曲をする」とした回答者は7.6%（9人）いた。「ボーカル／声楽をしている」回答者は6.8%（8人）おり、「音楽の演奏や作曲でお金を稼いだことがある」とした回答者も6.8%（8人）いた。

2.3.6. 楽器演奏との関わり

楽器メーカーのヤマハによると、子ども向け音楽教室の受講者は、1990年の約65万人をピークに、現在は約40万人と減少傾向にある（『朝日新聞』2010.9.11朝刊）。また1997年には家庭に眠る中古ピアノを買い取り海外に販売する企業のTVコマーシャルが話題となるなど、家庭における楽器の存在感の希薄化を示唆する事象が散見される。大学生ではどのような状況が見られるだろうか。

表6. は楽器演奏との関わりに関する設問への回答の集計結果である。学校音楽教育で学ぶ楽器を除き、演奏できる、あるいは1年以上やったことがある楽器について尋ねた。やはり群を抜いて多かったのがピアノで、回答者の40.7%（48人）がピアノの経験者であった。第2位はギターで11.9%（14人）が演奏できるという。その後は各種バンドや吹奏楽で用いられる木管楽器・打楽器・金管楽器・ピアノ以外のキーボード・ベースなどが続く。音楽への関心が高い学生が多いと思われる授業であるせいもあるだろうが、楽器を演奏する（できる）学生は比較的多いように思われる。

表6. 演奏できる・あるいは1年以上演奏したことがある楽器（複数回答可）

楽器	1. ピアノ	2. ギター (アコースティック 及びエレキ トリック)	3. 木管楽器	4. 打楽器(含 ドラム セット、 マリンバ、 シロホン など)	5. 金管楽器	6. ピアノ以 外のキー ボード	7. ベース (エレキ 及びウッ ド)	8. 弦楽器	9. DJ、スク ラッチ	10. その他	合計
N	48	14	11	10	9	8	7	3	3	2	118
%	40.7%	11.9%	9.3%	8.5%	7.6%	6.8%	5.9%	2.5%	2.5%	1.7%	100%

※表中の%は全回答者数の118名に対する百分率

財団法人ヤマハ音楽振興会の調査（2006）では、20代の男性の約4割が、また20代の女性の約7割が何らかの楽器が演奏できるとし、男性は「ギター」、女性は「ピアノ」という構図が浮かび上がった。本調査の回答者の性別は男性が32人、女性が86人であったが、ピアノが弾けるとした48人のうち男性はわずか3人で、ギターは14人のうち8人が男性だったので、ヤマハ調査と同様の傾向が確認できる。

2.3.7. 好きな音楽のジャンル

表7. は回答者に好きな音楽のジャンルを尋ねたものである。1位が76.3%（90人）が好きだと答えた「Jポップ」、2位は70人が好きだとした洋楽の「ロック・ポップス」で、3位

に32.2% (38人) の「ダンス・クラブ・ソウル・ヒップホップ」であった。特に大きな驚きはなく、
 順当な結果であった。

表7. 好きな音楽のジャンル（複数回答可）

ジャンル	1. J ポップ (広く含む。 インディー 系やJロッ クも含む)	2. 洋楽のロック ・ポップス (ヘビメタ も含む)	3. ダンス・ クラブ・ ソウル・ ヒップホップ	4. クラシック	5. アジア ン・ ポ ップ ス (韓国そ の 他)	6. イー ジー リス ニ ン グ ミ ュ ー ジ ック (含 ト ラ ック)	7. ワ ー ル ド ミ ュ ー ジ ック (含 レ ゲ エ)	8. ジャズ	9. その他	合計
N	90	70	38	24	22	21	20	15	5	118
%	76.3%	59.3%	32.2%	20.3%	18.6%	17.8%	16.9%	12.7%	4.2%	100%

※表中の%は全回答者数の118名に対する百分率

3. 考察

「ウォークマン」などのカセット式ヘッドホンステレオの黎明期に細川周平がはやくも指摘 (1981) していたとおり、1980年代以降、多くの種類のヘッドホンが開発・販売されるなど、ヘッドホンの重要性が増した。その後ポータブルのCDプレーヤーやMDプレーヤーが出現し、さらに「iPod」などの携帯音楽プレーヤーへと変化を遂げたが、人々がイヤホンやヘッドホンをつけて移動する姿は完全に定着している。人によっては通勤・散歩・ジョギングなどの必需品になっているにちがいない。

このような聴取形態の変化にともなって進行したと考えられるのが音楽聴取の「ながら化」である。マスメディア、とくにラジオの「ながら視聴」については、以前から指摘されている。たとえば携帯ラジオの生産で活況を呈する家電業界を取り上げた1957年の新聞記事に「乗り物の中や野球場などで耳にレシーバーをかけてポケットラジオを聞く人をよく見かける」(『朝日新聞』1957.2.8朝刊)とあり、携帯デバイスにより自分にしか聞こえない音を持ち歩く行動が、20世紀中頃の日本ですでに珍しくなくなっていたことがわかる。

しかし「ながら聴取」を前提とする音楽は実は古くからある。16～17世紀にヨーロッパで盛んになった「ターフェルムジーク (Tafelmusik)」はひとつの典型例であろう。これはパーティーや食事会のバックグラウンド用に作曲された組曲で、ドイツのヨハン・シャイン (Johann Schein, 1586-1630) が代表的な作曲家だが、より知名度の高いゲオルク・フィリップ・テレマン (Georg Philipp Telemann, 1681-1767) も代表作の1つが『ターフェルムジーク』と題された室内楽曲集となっている。これらの曲は深刻さや悲嘆には無縁で、軽快で心地よい楽想が

中心となっている。18世紀には同様のジャンルはディヴェルティメント (divertimento) に引き継がれ、ハイドンやモーツァルトがその代表的作曲家となった。20世紀に入るとフランスの作曲家、エリック・サティ (Erik Alfred Leslie Satie, 1866-1925) が1920年に作曲した『家具の音楽 (musique d'ameublement)』の例がある。これはリスナーによる専念聴取を回避することを念頭に書かれた曲集として有名である。このような考え方はアメリカのジョン・ケージ (John Milton Cage Jr., 1912-1992) による各種の実験音楽の試みや、イギリスのブライアン・イーノ (Brian Eno, 1948 -) の「アンビエント・ミュージック (ambient music)」の考え方などに影響を与えている。20世紀後半にはいわゆる「BGM」とか「イージーリスニング」など、「ながら聴取」を前提にした音楽が世の中のあちこちで流れるようになったことはいうまでもない。

つまり携帯音楽再生装置とヘッドホン／イヤホンが登場するはるか以前から音楽の「ながら聴取」は当たり前に行われていた。とはいえこれらのデバイスが「ながら聴取」に付加した要素もある。それは「ながら聴取」を想定せずに作られた音楽でさえも「ながら聴取」されるシーンが出現したことである。17世紀、食事会に呼ばれた客はそこに流れる「ターフェルムジーク」を聞きたくないと思っても有効な手段はなかった。携帯ラジオは電源のON/OFFや放送局の選択はできるようになったが、そこに流れてくる音(楽)の中身を選択することはできない。しかし携帯音楽プレーヤーの場合、リスナーはその記憶装置に記録されている何千という曲から好きなものを選ぶ自由を手にした。そこでは「シリアスな」音楽でさえも「ながら聴取」の対象になり得る。また「プレイリスト」という概念に象徴されるように、全く異なる「アルバム」をばらばらにして、個々の曲を好きなように組み合わせる「組曲」のように扱うこともできるようになった。

ここで見てくるのは、「ながら聴取」という表現が連想させる、低下した音楽聴取行動の質——「集中せず、散漫なリスニング」——という認識だけでは捉えきれない、音楽聴取行動の重要な変質である。つまり音楽史においてリスナーがずっと置かれてきた、一方的に受動的な立場——見たくないものは目をつぶればいいが、聞きたくない音は完全に防ぐことさえ困難である——が揺らいでいるのだ。リスナーは音楽聴取の場所・時間・内容の選択権を手に入れたことになる。

日常生活において人々は様々な音に包まれている。自然音(鳥の鳴き声や風の音、川のせせらぎなど)や人工音(自動車や電車の音やスピーカーから流れる音楽や演説、各種の騒音など)が地点により独特の「サウンド・スケープ(音の風景)」を構成していることを指摘したのはカナダの作曲家、マリー・シェーファー (R. Murray Schafer, 1933 -) であった(小川他1985)。Time誌が1981年の記事で「ウォークマン」は外界との接触を遮断するのに都合な機材だと皮肉ったように(人は聞きたくない音を遮断する道具を手に入れた)、屋外でヘッドホンやイヤホンを使って音楽に耳を傾ける現在主流の聴取形態は、サウンド・スケープを拒絶

する行動のようにも見える。

携帯音楽デバイスとヘッドホン／イヤホンはしかしサウンド・スケープやイーノのいう「アンビエントな」音空間を拒絶するだけのものではない。それぞれのリスナーは歩きながら、あるいは電車の中で、あるいはコーヒーショップで、自分が耳を傾けている音楽を周りの（視覚的）風景に重ね合わせている。音による心象風景を各自が演出しているといってもよいだろう。他者に提供してもらった音空間に身をまかせるのではなく、自らが主体的な選択をしているのだ。

さらに言うなら、歩行中や電車の中やコーヒーショップなどでの携帯音楽デバイスによるリスニングでは、本質的には専念聴取をしている時間があるかもしれない。歩き「ながら」、あるいはコーヒーをのみ「ながら」音楽に集中していることも十分ありうるのだ。

今回の調査で示された、大学生の音楽聴取時間のうち平均して4分の3が「ながら聴取」だという結果は、一見、彼らが音楽聴取における主体性を失っているようにも見える。しかし音楽史、いや正確にはオーディエンス史において現在はリスナーがこれまでにない権利を獲得した時代であるとも言えるので、その文脈の中で解釈するべきであろう。今後の研究では「プレイリストの作成」や「再生する曲の選択」を含めた、音楽の聴取行動におけるリスナーの主体性にも踏み込みたい。

携帯音楽プレイヤーの普及は、果たして大学生の社会行動や人間関係に何らかの影響を及ぼしているのだろうか。実証的な議論はできないが、少し考えてみたい。今回の調査で明らかになったように、大学生の録音音楽聴取行動はかなり個人ベースで行われている部分が多い。イヤホン等の利用が聴取時間の7割以上だとする回答者が58.8%（118人中69人）だという数字はそれを物語っている。音楽の個別聴取化を憂慮する声もある。しかし前述のようになり前からポータブルラジオやカセット式ヘッドホンステレオのイヤホンに耳を傾ける人は少なからず存在しており、そのような行動が突然、遍在化したわけではない。電車内でのヘッドホンから漏れ聞こえるシャカシャカ音や、イヤホンを耳に突っ込んだままでの会話の応答、さらにはイヤホンをしたままでの自転車運転など、マナーや交通安全上の問題も存在するが、それは「iPod」以降に出現した問題ではないことは既述の通りである。

さらに言うと、情報装置としての携帯音楽プレイヤーは、基本的に情報（音楽）を受容（reception）するためのものなので、その利用は受け身の情報行動である。したがって、それが大学生や若者の人間関係に大きな影響を及ぼしているとは考えにくい面がある。しかし情報の発信（transmission）ができ、様々な情報を検索したり取得したりできるスマートフォンになると話は別で、大学生や若者の社会行動や人間関係に少なからず影響を与えていることは容易に察しがつく。本論文のスコープを超えてしまうが、携帯音楽プレイヤーとしても使われているスマートフォンについて考えてみると、電話機能・メール機能・ネット閲覧機能だけでな

く、カメラ・GPS・ジャイロなどのハード的機能はもちろん、ソフト（「アプリ」）次第で情報装置としての可能性が大きい。各種ソーシャル・ネットワーク・サービス（「SNS」）の例を見てもわかるように、パソコンとインターネットだけの状況から大きな変化が生まれつつある。

もう一点、検討しておきたいのは音楽コンテンツの取得手段についてである。前述のように、音楽コンテンツのデジタル化は完全なコピーが何回も作れること、機器の小型化／大容量化が容易であること、送受信しやすいことなどの特徴があって現在の音楽聴取環境が成立している。とはいってもここで取り上げたいのは違法ダウンロードや違法コピーの問題ではない。ひとつはディスクなどの物理的実体にこだわるかどうか、もうひとつは音楽コンテンツを「所有」することの意味、あるいは必然性についての検討である。

今回の調査では回答者のうち7割弱がCDで入手した音楽はいったんパソコンや携帯音楽プレーヤーにとりこんでしまうとCDそのものを再生することは少ない、と答えた。彼らが利用する音楽デバイスの第1位が「iPod」、第2位がパソコンであることを考えれば納得がいく数字ではある。ディスクを1枚ずつプレーヤーにセットアップする手間も不要であるし、通常の再生環境であれば音質にそれほど顕著な差が感じられるわけでもない。

今回の調査では尋ねなかったが、当該授業での学生との議論から、彼らの過半数が音楽のダウンロード購入に抵抗感を持っている様子が分かった。なぜかと尋ねると、ある女子学生は「実体がほしいから」と答えていた。データの紛失や破損への備えということもあるだろうし、プレーヤーやパソコンを新調するときのデータ移行に関する不安もあるだろう。この点に関しては国によりダウンロード販売への抵抗感が異なる可能性がある。アメリカでは音楽に限らずダウンロード販売がよく利用されていると一般的に言われているが、そのあたりは今後比較研究を行っていきたい。

ただし日本でもスマートフォンやタブレット型コンピューターの場合、ソフトウェア（アプリ）の入手方法はダウンロードにはほぼ限定されているので、その延長上で音楽コンテンツのダウンロード購入が広がる可能性がある。また今後は日本でも電子書籍が本格的に導入される見通しとなっており、映画の購入やレンタルもネットワーク経由での利用が増加すれば、音楽も例外ではなくなるだろう。

しかし音楽に限らず、各種コンテンツのネットワーク経由での配信技術（課金技術を含む）が確立され、サーバーのクラウド化が進み、通信速度がより高速化されると曖昧になってくるのが、購入とレンタルの区別である。21世紀になってから音楽配信を世界でリードしているアップル社の現在のサービスでは、同社の「iTunesストア」から購入した音楽コンテンツは、パソコンに接続しなくても各種デバイス間でネットワークを経由して同期することができるようになっている。たとえパソコンから削除した曲でも、クラウド上に購入記録は残っており他のデバイスで聞くことができる。

また最近注目されているのが「定額・聞き放題」の音楽配信サービスである。スウェーデンで立ち上がった「スポティファイ (Spotify)」やアメリカの「ラプソディ (Rhapsody)」、それにソニー社が日本でも2012年にサービスをはじめた「ミュージック・アンリミテッド (Music Unlimited)」などがそれにあたる。これら3サービスの利用月額はそれぞれ、9ドル99セント、10ドル、そして1480円で、比較的低額の部類に属するといえよう。ストリーミングによる聴取が基本で、一部ダウンロード方式も併用されるが、通信環境さえ整っていれば好きな時に好きな場所で好きな音楽を何回でも聞くことができる。もちろん合法的行為である。

このような音楽聴取形態が一般化すると、音楽を「購入」することの意味が問われてくる。SPの出現により録音音楽の商業化が始まって以来、ほぼ1世紀の間、録音音楽は購入（そして後にはレンタルという手段も出現したが）するのが原則であり続けてきた。「レコード愛好家」は自宅に何千枚というレコードやCDのコレクションを持つことを誇りにしてきた。もともとレコード購入に支払う対価は、物理的な「実体」云々ではなく、その音楽コンテンツへのアクセス権が中心的な価値であったはずだ。レコード愛好家たちはいかに多くの音楽コンテンツへのアクセスを有しているかを競っていたのだ。しかし「定額・聞き放題」の音楽配信サービスはレコードやCDを所有することの意味をいとも簡単に形骸化させてしまった。

井手口彰典（2009）は現在の音楽文化が抱えるこのあたりの矛盾を、音楽の「所有か参照か」という適切な切り口で考察しているが、現在の状況においては音楽コンテンツを「所有」することの意味が薄れつつある可能性がじゅうぶんある。「定額・聞き放題」の有料会員たちは音楽コンテンツの所有にはこだわらないと思われるが、もしそうだとすると、そのことが音楽産業全体に対してもインプリケーションはきわめて大きいと考えられよう。今後の研究では、現在のリスナーが音楽コンテンツを「所有」することにどの程度こだわっているのかにも光を当てたい。

注

- 1) ラジカセはアメリカでは“boombox”、イギリスでは“ghetto blaster”と呼ばれていたことで分かるように、両国では街頭で音楽を大音量で再生する機材としてのイメージが定着していた。音楽的にはその録音機能と、特にダブルカセットレコーダー搭載によるダビング機能を駆使した使い方が注目される。サンプリングやミキシング、リミックスなどの手法が幅広い層に提供されたことになり、単に受け身のオーディエンスではなく、積極的に音素材を操作して楽しむ、新しいタイプの音楽行動が生まれた。自分の好きな音楽を入れて編集したテープを他の人と交換したり、デモテープを作ったり、ダンス練習の音源にするなど、特にストリート系の音楽行動にとって大きな役割を果たしてきている。
- 2) 欧米の都会全てがラジカセによって騒がしくなったというわけではない。たとえばニューヨーク在住の作曲家、Richard Kostelanetzはストックホルムが静謐そのものであった印象をニューヨークタイムズ紙に寄稿している (*The New York Times*, December 6, 1987)。
- 3) 総務省の通信利用動向調査 (2010年) によると、年齢階級別のインターネット利用率は2010年末で20~29歳が97.4%で1番高く、次に13~19歳が95.6%で第2位であった。パソコンの利用率を年齢階級別に見ると第1位は13~19歳の年齢階級で91.5%であり、第2位は20~29歳の90.7%であった。

文 献

- Benjamin, Walter, 1936, *Das Kunstwerk im Zeitalter seiner technischen Reproduzierbarkeit*. (=1970, 高木久雄他訳「複製技術の時代における芸術作品」佐々木基一編集『ヴァルター・ベンヤミン著作集2』晶文社.)
- 細川周平, 1981, 『ウォークマンの修辞学』朝日出版社.
- 井手口彰典, 2009, 『双書音楽文化の現在3 ネットワーク・ミュージッキング ——「参照の時代」の音楽文化』勁草書房.
- NHK放送文化研究所, 2011, 『2010年国民生活時間調査報告書』, PDF書類.
- 日本レコード協会, 2012, 『2011年度音楽メディアユーザー実態調査』報告書.
- 小川博司他, 1986, 『波の記譜法—環境音楽とはなにか』時事通信社.
- Small, Christopher, 1998, *Musicking: the Meanings of Performing and Listening*, Middletown, Conn.: Wesleyan University Press.
- 総務省, 2011, 『平成23年社会生活基本調査 生活行動に関する結果 結果の概要』.
- , 2010, 『平成22年通信利用動向調査の結果(概要)』.
- 財団法人ヤマハ音楽振興会音楽研究事業部ヤマハ音楽研究所, 2006, 『2000人の音楽ライフスタイルと音楽感覚に関する調査』.

(まつだ・たけし 外国語学部教授)